

〈中本正智博士 著書紹介〉 『日本語の系譜』

橋尾, 直和

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

88

(終了ページ / End Page)

90

(発行年 / Year)

1995-02-24

『日本語の系譜』

橋 尾 直 和

本書は、「日本語は孤立ではなく、東シナ海沿岸域に成立したアジア古層語の一つの発展形態である」との説を証明しようとした、日本語の系譜論である。音声学と言語地理学の最新の成果を背景に、アイヌ語、朝鮮語などの周辺語諸語との関連を明らかにし、日本語成立の過程を解き明かした、アジア全域を視野に収めた画期的な論考である。

本書の構成は、8つの章から成っている。

「系統への道」では、日本語は、アジア大陸に広がったアジア古層語につながる一団であり、それが発達したものであると説いている。日本語が周辺言語とつながるのは、アジア古層語に発達した特徴が周辺言語の中に残存しているからだと考えている。従来の学者が用いた北方系とか南方系とかいうのは、視野を広げて、強文化圏の中国文化を含めて見るならば、強文化圏の周辺域に位置しており、それらにつながる日本語の特徴は、周辺域に残存したアジア古層語の特徴がある、としている。筆者が「系統」とせず、「系譜」としたのは、日本語の系統や、その成立と発達を包括して解明する原理と方法を、アジア大陸の言語の広がり念頭において模索したこと起因する。

語ごとにアジア言語地図を描くことができれば、日本語ばかりではなく、アジア諸言語の系統と、その成立と発達も解明できるものとみており、分布から新古の層を決定する原則として5つの原則を立てている。原則1《波及の原則》、原則2《連続分布の原則》、原則3《断続分布の原則》、原則4《類似語の原則》、原則5《孤立語の原則》である。これらは、文献学的な知見と、比較言語学的な音韻法則とを併用して適用すると効果的である、としている。

「系統の迷路の中で」では、従来の日本語の系統論には、祖語説、混合説、重層説、移動説等が論じられてきたが、今だ解明するに至っていないことを指摘し、それらに代わる方法として「波及説」を提唱している。これは、日本語の系統論が、言語がアジア的広がりをもって文化の成立と各時代の段階的な波及に影響されて変容したとする立場をとっている。

日本語が周辺諸語とつながる例として、巫女を表す語が東北でイタコ、沖縄でユタであるが、これらは同源であるとし、さらにアイヌ語の言葉を表すitakも同源であると説いている。他に、朝鮮語、プユマ語、ドラヴィタ語と日本語の類似する語形を挙げ、これらは単なる偶然でかたづけることはできないことを主張している。つまり、従来の系統論は、次の2点にとらわれすぎていたのだ、としている。(1) 日本語に近似する同系統の言語を発見

すること。(2) 同系統の言語は音韻法則で証明できるということ。これに対し、言語総本の存在を可能ならしめている文化的、地理的背景も併せて考慮することが新しい系統論の可能性をひらく道である、としている。

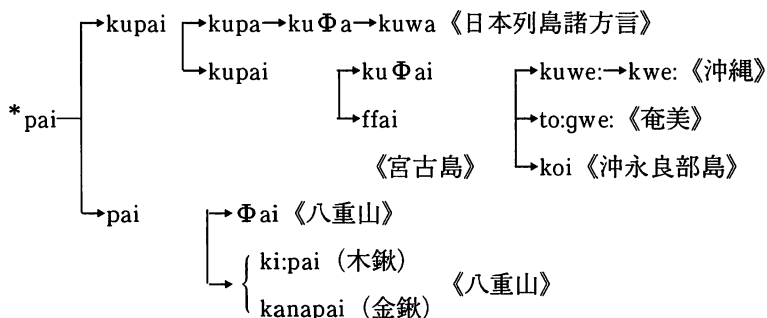
「分布が歴史を語る」では、時とともに孤立性を深め、かつ重層性をもっている日本語の系統と成立を考えるには、周辺諸国の多数の言語との比較が必要になる。その前段階とし、日本語内部における諸方言を含めた発達段階の解明が重要である、と説いている。

筆者は、日本語の発達をたどり、その成立を考えるには、それぞれの学問領域で開拓してきた成果と方法を一つの学問体系の中に有機的に活用しなければならない、として「多角的言語史」なるものを提唱している。これには、次の3点が重要であるとしている。一つは、資料の総合性、二つは、言語現象とその背後にある条件の包括性、三つは、方法の協調性である。そして、「とんぼ」の祖形を再講し、アケズ系の原日本語は、*ア^hケントゥ *a^hke^htu と推定している。

「言葉をたずねて」では、周辺諸国の言語につながる日本語の姿、そして日本列島の四周と関係をもたざるえない、東シナ海沿岸地域の地理的および文化的な現実をふまえたとき、日本語の系統をたどるには、これまで論じてきた「波及説」が最も有力な方法であるとし、日本、琉球の兩列島ばかりでなく、周辺の朝鮮半島や大陸という、それぞれの言語を生み出した器の中で、その類似性と異質性を見極めることから、まず始める必要があるとしている。

そして、琉球語、アイヌ語、朝鮮語などと比較して、以下の意味を表す語のつながりを解明している。森・山・原、川、水、海、土、砂、父、母、虫、蜂、蝶、蚕、糸、蜘蛛、亀、目、口、言う、舌、歯、手、足、骨、皮、乳、血、稲と米・そして穀類、木、葉、花、蕓と葱、鋏、鍋と釜、籠、瓶、箕、神、ニライカナイ、シャーマン。これらの説明に、筆者は本書の中で一番多くのページを費やしている。

たとえば、農具の「鋏」の祖形を *pai とし、日本列島諸方言の kuwa はその派生形とみなしている。琉球列島諸方言も以下のように解釈している。



そして、これらとアイヌ語の鋏 クプカ kupka、朝鮮語の鋏 クウェンイ kweji、鋤 homaj、インドネシア語の鋤 バヤク bajakuなどが同系の語とみている。

「古代列島の民族」では、日本民族が列島の強文化圏をつくることにより、列島の民族とその文化が一つのものに統合されていく以前には、同種族が異化した多様の民族や異系の民族があったと想定し、列島のアイヌ民族と琉球民族も、異種ながらも微妙な差異をもってつながったとみている。筆者は、ニライカナイを「土の屋、日の屋」と語源解釈しているが、古代人が太陽神の居所を地の中の洞穴とみていることや、琉球とアイヌが穴居生活していた点などで、両者につながりがある、としている。

「文化と波及」では、日本語の系統はどうなっているのか、また日本語はどこで形成されたのか、どのような過程で発達してきたのか、といった疑問を解くには「波及説」が最も実現性の大きい説であることを主張している。

言語の波及発達を総体的に問題にして比較言語学と言語地理学の方法によって考えようとするのが「波及説」であるが、言語ないし文化の波及段階を、次の3つに分類している。

(1) 自然波及＝狩猟、採集のための部族移動による波及、(2) 統合波及＝侵略等部族統合をもたらす部族移動による波及、(3) 摂取波及＝少数の担い手などの交渉によってもたらされる波及。日本列島のような島嶼部では、(1)と(3)の波及が主であったと考えている。また、言語の波及をささえ、それを可能にしているのは言語変化の原理であるとし、次の3点を挙げている。

(1) この世の変化しない言語はない。その変化は常に内的変化が同時進行している。

(2) 内的変化は一言語を多くの言語に分岐させていく。もとの言語と分岐した言語は祖語と分岐語の関係をなす。(3) 強文化圏が成立すると周辺の弱文化域からみれば外的変化をこうむる結果をまねき、弱文化は強文化圏寄りに推移して、その間の隔たりを小さくしていく。

ところが、従来の説は、これらの言語変化の原理を総合的に視野に入れず、いずれかに片寄って論を進めている場合が多い、としている。そして、人種と言語(ないし文化)の分布を、強文化圏の発達と弱文化域との関係においてとらえたとき、日本語の形成の地は、東シナ海沿岸地域とせざるを得なくなる、と結論づけている。

「列島言語史の方法」では、記述言語学からはじまって、文献言語史学、言語地理学、比較言語学の方法を総合的に援用して、列島言語史を多角的かつ総合的にたどる方法を、「きのこ」の例を提示することによって試みている。筆者は、さらにこの語をアイヌ語、朝鮮語、インドネシア語と比較している。

「アジアの言語と日本語の系譜」では、水、土、火、太陽、目のアジア言語地図を描き、解説している。そして、全アジアの言語の分布の考察をふまえて、日本語の系統や系譜について言うとするれば、日本語は東シナ海沿岸域で形成された言語であり、さらにその源流をたどれば、アジア大陸ではなされていたアジアの古層語とつながるものであること、周辺の強文化圏の言語の影響を受けながら発達したのが現在ある日本語であることと結論づけている。

(1985年7月10日・青土社/1992年8月20日・青土社(新版)) (高知女子大学助教授)